

に関しては第三子～第五子が遅れぎみではあるが、体重と同様に増加傾向にある。頭囲はほぼ Babson のカーブに一致していた。

睡眠のパターンも正常乳児と同様の傾向にあり、特に SFD のハンディは認められなかった。

排便もほぼ正常乳児と同様のものであった。哺乳および離乳食については、哺乳量は正常乳児と変わりなく、離乳食ではやゝスタートが遅れてはいたが第一子～第五子とも全員満一才時には離乳を完了した。

〔参考文献〕

Babson, S. G. : Growth of low birth weight infant
J, Pediat vol 77, 11, 1970

乳幼児身体発育値 : 厚生省児童家庭局母子衛生課 昭和45年

中 島 文 雄 : 乳児の一日の睡眠時間
小児保健 14, 78, 1955

中 山 健 太 郎 : 排尿, 排便について
小児保健学, 医学書院 1968

離乳基本案 : 文部省科学研究班 1956～1958

五つ子の発達 —— 特に精神運動発達面よりの検討

研究協力者 (東京都立大学名誉教授) 山下 俊 郎
同 研究者

(鹿児島大学教授) 島 田 俊 秀

(東京家政大学講師) 大 滝 ミドリ

(東京家政大学講師) 川 合 貞 子

五つ子に関する心理学的研究の歴史:

五つ子に関する心理学的研究は1934年にCanadaのTorontoで生まれたDionne家の五つ子に就いての研究が世界で最初のものであり、生後3年間の追隨研究がToronto大学のW、E. Blatz教授の指導のもとに行なわれたものである。その成果は医学的研究を行なったMacArthurおよびFord両教授の報告と共に、次に挙げる5つの報告がBlatz教授編のCollected Studies on the Dionne Quintuplets, 1937 とし～University of Toronto Pressから刊行されている。5つの報告は1) Mental Growth, 2) Early Social Development,

3) Development of Self-Discipline, 4) Routine Training, 5) Early Development in Spoken Language に就いて, Blatz 教授指導のもとにかく班の研究者が遂行した研究の結果である。その後はまとまつた研究は発表されていない。(ただ, Poland の五つ子については5才における I, Q, 測定の結果が発表されていると言うことが伝えられているが, 心理学的文献には現われていないようである。)

研究の目的と方法:

我々は山下五つ子については, 可能な限りにおいて心理的発達を追隨研究を行ない, 問題があればこれを鮮明しそのよき成長に資することを目的として研究を行なっている。従つてこの研究は未熟児の心理的発達の鮮明とその指導に寄与し得るものと考えている。

我々は後述の2つのテストによつて全体的発達の把握を第1年次の目的としたが, テストを行なうに当つては嬰兒達の健康状態の許す範囲を厳守することにした。Dionne Quintuplets 場合には心理学的研究は生後11カ月から始められているが, 嬰兒達の生存 survival が至上命令であるとの理由によつて当時の医学的水準の然らしめる所であつたと推定される。我々の場合は, 嬰兒達が保育器を出た時期, 生後2カ月から観察を開始し, 生後3カ月から心理テストを行なつた。

まず, 第1年次である1976年度においては, 可能であれば嬰兒達の生まれた日を中心とする3日ないし5日の期間中に, 毎月総合的発達を把握できる観察とテストを行なうこととし, さらに分析による発達プロフィールを作ることにして出発した。しかし, 実施の段階に入ると嬰兒達の健康状態および病院ならびに山下家の諸条件によつて, 必ずしも我々の意図通りには行なわれなかつた。しかし, 生後2カ月から体系的な観察とテストを実施したのは, 心理学的研究においては, これが始めてであろう。

なお, Dionne Quintuplets の場合は一卵性であつたのに対して, 山下五つ子は五卵性と判定されていることは注意するべきであろう。

我々は観察およびテストの方法として, 第1に津守真・稲毛教子の乳幼児精神発達質問紙を観察の方法として用いた。これは研究者が, 常時嬰兒に接している看護婦, 母親, ベビーシッター, 保母等に質問し, その結果をさらに研究者の観察によつてチェックするものである。第2に, テストとしては古賀行義博士編のMCCベビーテスト(Mother Child Counseling Baby Test)を用い, その実施には研究協力者の心理学者3名が当つた。これらの質問紙とテストは厳密な標準化の手続きを経て作製されたもので, 戦後のものとして最も信頼し得るものである。

なお, 質問紙の実施検討とテストの実施には, 山下五つ子が鹿児島市立病院にいる間は, 協力者島田が当り, 東京に帰つてからは日本大学板橋病院と山下家において大滝および川合が実施し, 山下がこれを指導するという体制をとつて来ている。

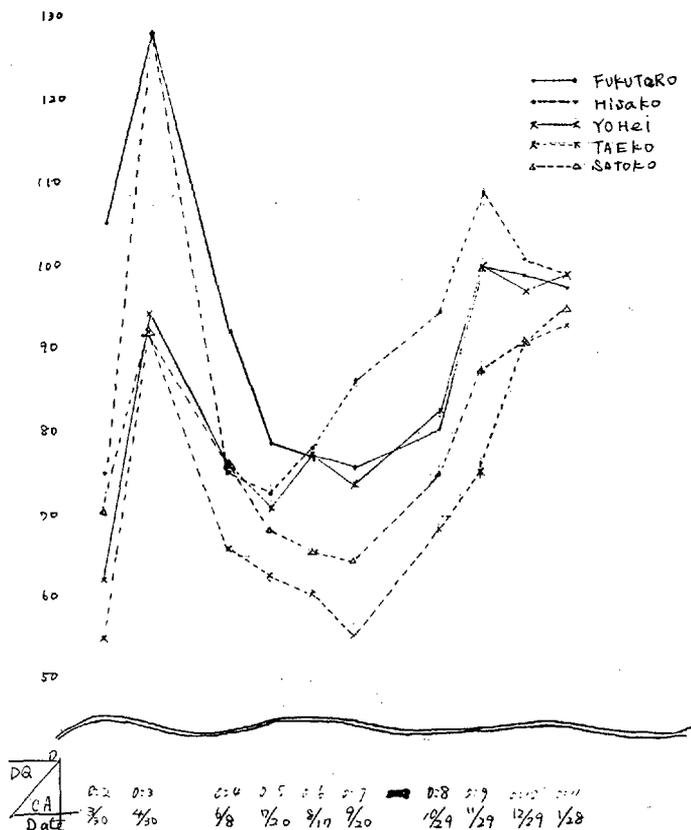
研究結果:

生後1年間は毎月誕生日前後に観察とテストを行なうという予定は, 必ずしもその通りに行なわれなかつたが, ほぼ予定に近い日に行なわれたと見てよい。実施日および該当月は後に示す図にある通りである。

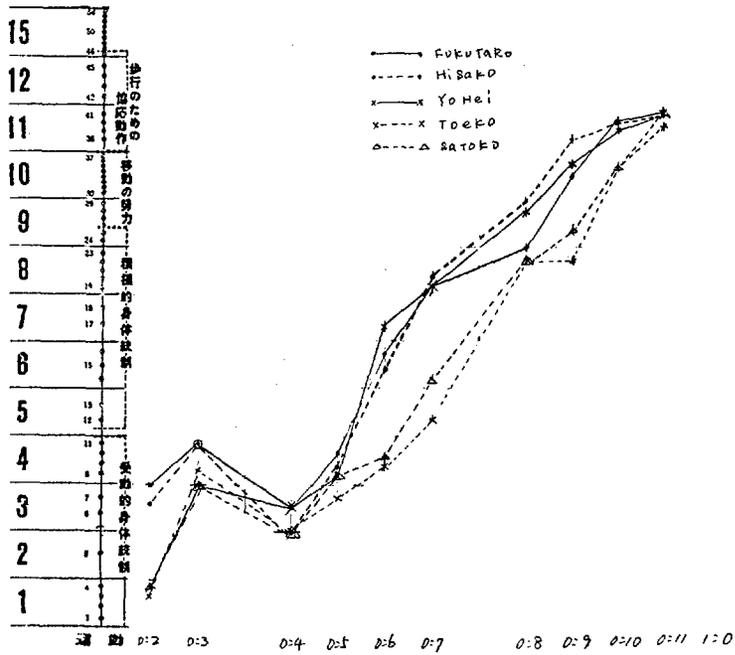
まず、津守・稲毛の質問紙による発達的全体的推移を示すと第1図の通りである。5児の発達指数D, Q, は鹿児島にいる間はかなりの開きを見せている。初め福太郎が最も高く他の4児と可なり開いているが、次に寿子が伸びて、福太郎、寿子の2児と他の3児との間に著しい開きが出来ている。しかし、この3児も90台という正常値の範囲に入る程のびている。ところが東京へ移った4ヵ月以後は低下している。これは新らしい環境への適応が困難であった故と推定される。とくに退院の頃に寿子を除く他の4児にこの傾向が著しい。しかし、退院後、5児とも揃ってD, Q, は毎月上昇し、生後1年と見ていい1月28日には5児とも40-100という正常値の域に達している。

以上は全体的推移であるが、この質問紙に分類されている運動、探索操作、社会、食事、理解言語の機能別年間推移を見ると第2-6図に示す図の通りであって、個々の機能はきわめて順調に発達している。

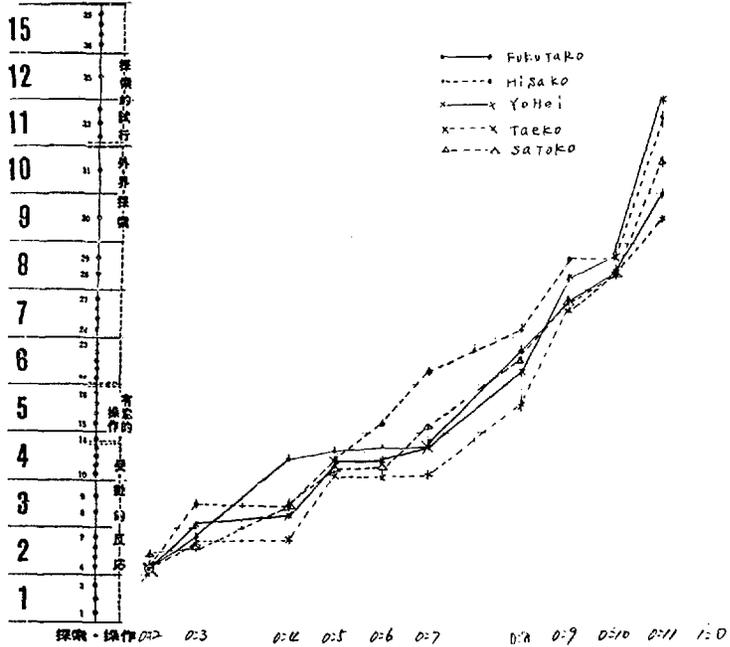
第1図 津守、稲毛によるD, Qの全体的推移



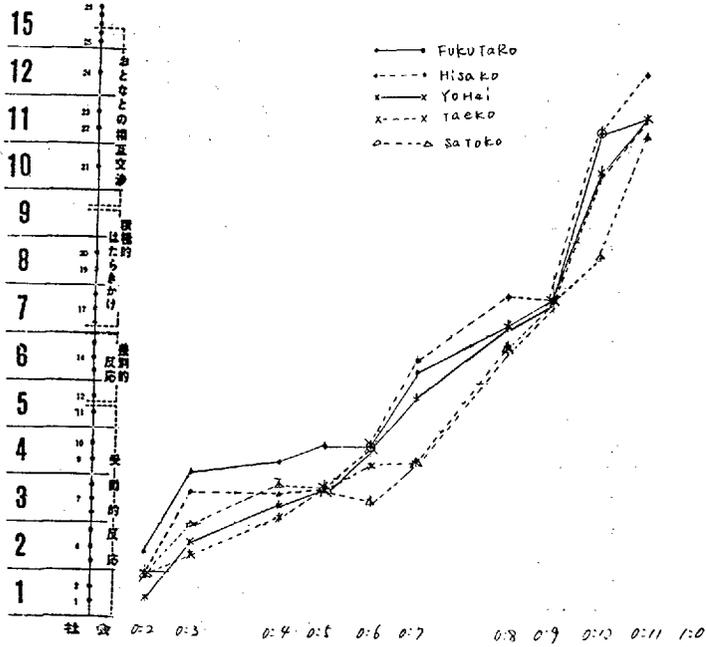
第2図 運動発達の一一年間の推移



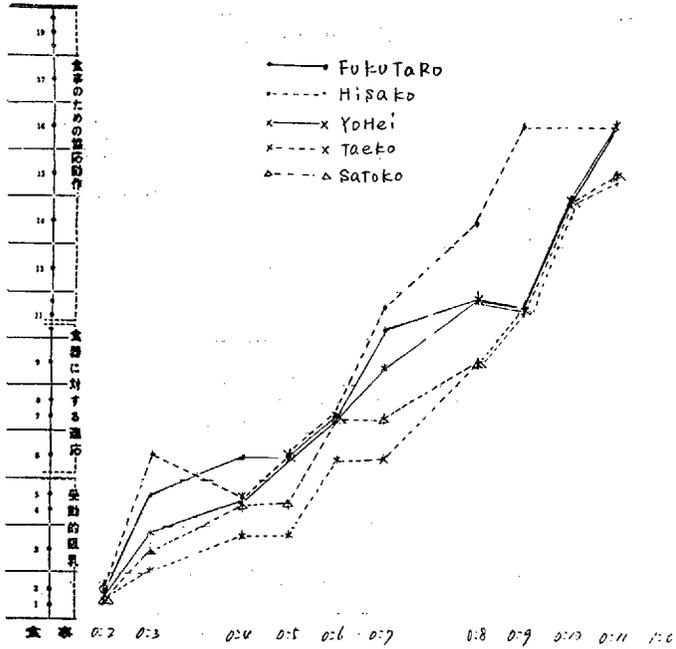
第3図 探索・操作行動発達の一一年間の推移



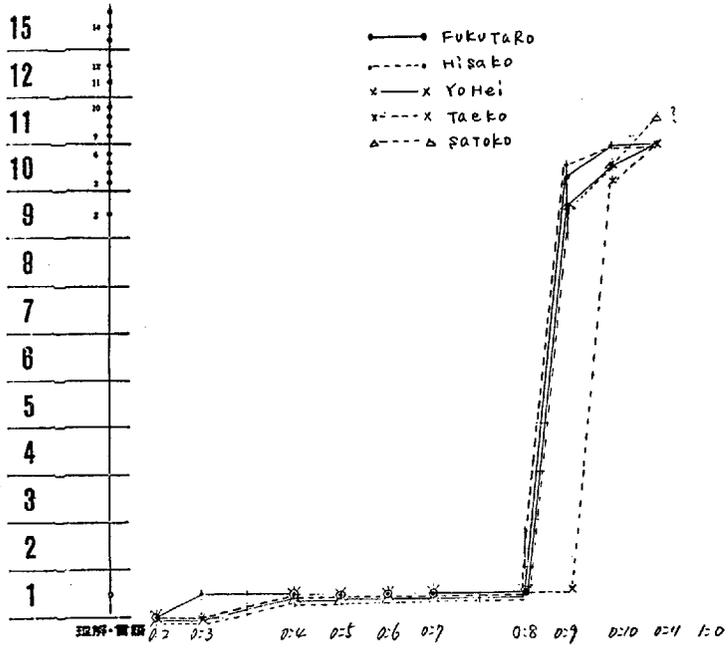
第4図 社会的行動発達の一年度の推移



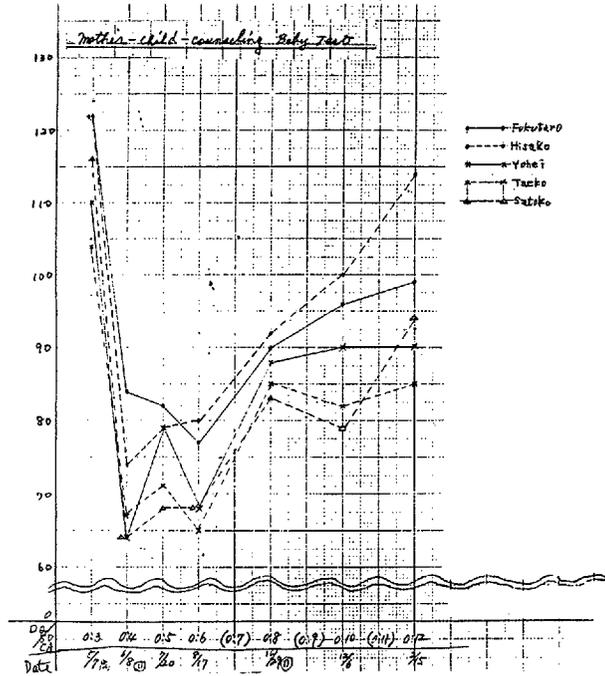
第5図 食事行動発達の一年度の推移



第6図 理解・言語発達の一年間の推移



第7図 MCCベビーテストの結果による一年間の推移



次にMCCベビーテストの結果について見ると、第7図に見る通りである。この場合、テスターが直接行なうものが大部分である為、津守・稲毛式の場合より順調に実施できないことが多かった。(前述の諸条件の為) 第1回のテストは5児が東京へ向かう直前に行ない、その後は東京で行なった。全体的傾向については、津守・稲毛式の場合とほぼ同様で、5児共D、Q、が低下している。若干の差異はあるが、全体として見るとき、家庭へ帰ってから5児共D、Q、が上昇し、とくに寿子に著しいものがある。それと共に、月令の低い時期に低位にあつた妙子、智子の上昇が著しいことも目立っている。そして、全体として見るとき、5児とも正常ないしそれ以上に達していることも注意されてよい。5児相互の開きは津守・稲毛式の場合ほどせばめられていないが、今後さらに狭められてくるものと予測される。

概 括：

山下五つ子の心理的発達検査の以上の結果については、さらに分析すべき問題が含まれているが、これは今後の研究に待ちたい。

五つ子の発達神経学的研究

研究協力者 (東大分院小児科) 鈴木昌樹

研究目的：

鹿児島市立病院において、昭和51年1月31日に出生した「五つ子」は、同病院産婦人科を始めとして、関係者のチームワークと努力により、全員無事保育に成功しえたことは周知の通りである。¹⁾しかしながら多胎、低出生体重など大きなハンディキャップを有しているこれらの小児に対しては、長期間成長、発育を追跡し、必要があればもつとも適切な処置をとることは必要なことであり、またこのような小児の追跡研究は、今後の周産期医学、新生児医学のあり方を考える上にも大切なことと考えられる。

そこで研究協力者は、これらの小児について、発達神経学的検査をおこない、運動発達との関係について検討をおこなった。

研究方法：

対象となつた「五つ子」の小児について、昭和51年11月9日(9カ月)より、昭和52年3月14日(1年1カ月)の間、1カ月に1回の割合にて発達神経学的検査をおこなった。

施行した検査としては、肢位や自発運動、不随意運動の観察、筋緊張状態、腱反射などの一般神経学的検査の他、乳児期の運動障害と密接な関係をもっている姿勢反射、原始反射には特に注意をはらった。

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

五つ子に関する心理学的研究の歴史:

五つ子に関する心理学的研究は1934年にCanadaのTorontoで生まれたDionne家の五つ子に就いての研究が世界で最初のものであり、生後3年間の追隨研究がToronto大学のW、E、Blatz教授の指導のもとに行なわれたものである。その成果は医学的研究を行なったMacArthurおよびFord両教授の報告と共に、次に挙げる5つの報告がBlatz教授編のCollected Studies on the Dionne Quintuplets, 1937 とし～University of Toronto Pressから刊行されている。